

千石船という呼称は本来は米一千石（約百五十トン）を積むことができる船といふところからきたもの。明治十七年、十立方尺（一尺は約三十センチ）が一石と定められ、ここで初めて石数が容積を表す単位として使われるようになります。洋式船は百立方尺を一トンとしたので、和船の十石は一トンという計算になります。

近世以降の和船の絵図には、帆に必ず縦線が描かれています。これは、幅二尺五寸または三尺（年代によって異なります。十八世紀初期以降は狭くなるのが一般的）の木綿布を横に継ぎ合わせている継ぎ目です。この木綿布を何反継ぎ合わせているか、その数が帆の反数となります。長さは関係ありません。ちなみに千石積み弁財船では、二十五反が普通でした。

櫓の挺数は、左右両舷を合わせた数です。初期の関船の場合、櫓四挺が帆一反と等価走る堅牢な船だったといえます。伊豆の山々で育った楠や杉の巨木が船材に用いられたと考えられ、狩野川上流の天城湯ヶ島町に軽野神社があり、楠田、船原などの地名も残っています。

遠江の船としては、大井川の下流（現在の島田市初倉の船木近辺）で仁徳天皇の時代に船が造られたとあります。

駿河では、天智天皇二年（六六三）に出陣した、百濟救援のための日本軍の船が造られました。日本軍は、朝鮮の白村江（はくすぎのえ）で新羅・唐の連合軍と戦い大敗しましたが、この時の救援部隊の船団の将軍が盧原君臣（いほはらのきみおみ）とあることから軍団の船もかつて盧原国があった清水市で建造されたことが推定されます。当時の清水には朝鮮からたくさんのお化人が移り住み、これらの人々が伝えた技術で駿河の造船が進歩を遂げたと考えられ

とされてきました。

駿河湾の和船

●古代からの造船技術

静岡県では、登呂遺跡や山木遺跡で弥生時代の丸木船が発見され、神明原遺跡からは弥生時代中期の丸木船と權が出土しています。

歴史に登場する駿河湾で最古の船は、『日本書紀』の中のもので、『日本書紀』には古代における静岡県の伊豆、駿河、遠江の三つの国の「船造場」とそこを代表する有名な船が記されています。

伊豆には応神天皇が造らせたという「枯野（からぬ）」という大船があり、大変速くしています。

●駿河湾の水軍

中世には沼津と江浦の港に「問丸」が置かれ、十六世紀には江浦に「伊勢船」が入港したことが記録に残っています。

戦国時代になると、海上での軍事行動、警固、運輸などのために、伊豆一帯では北条氏が北条水軍を編成。駿河から遠江を領地とした今川氏は、吉原（富士川河口）、興津（興津川河口）、江尻（清水市）、用宗（静岡市）、石津（焼津市）、相良、掛塚（天竜川河口）の港を統一して水軍を結成。その後今川氏に代わって一帯を治めた武田氏が本格的な水軍を作りました。これらの水軍の海戦で安宅船が活躍したことが『北条五代記』に語られています。静岡市にあった用宗城は持舟城とも呼ばれていました。